

白光（鲁迅作品日文版）PDF转换可能丢失图片或格式，建议阅读原文

[https://www.100test.com/kao\\_ti2020/245/2021\\_2022\\_\\_E7\\_99\\_BD\\_E5\\_85\\_89\\_EF\\_BC\\_88\\_E9\\_c105\\_245731.htm](https://www.100test.com/kao_ti2020/245/2021_2022__E7_99_BD_E5_85_89_EF_BC_88_E9_c105_245731.htm)

土成（ちんしせい）がのの表をて、家へって来たにはもう午後であった。彼は行ったには手ッ取早く示板をて、まず上段の字をした。字も少くはないが、皆先きを争い、るるを恐れるように彼の眼の中に（おど）り上って来た。しかしそれにがっているのは土成の二字ではなかった。彼は新きなおしにもう一度十二枚の示のの中を一つ一つしねて人名を皆尽したが、遂に土成の名を出すことが出来なかった。彼はただの壁の前に突立っていた。（すずかぜ）はそよそよと彼の白交りの短いのを吹き散らしたが、初冬の太はかえって暖（あたた）かに彼を照し、日に晒された彼は眩を感じて、色は灰色に成りり、のため赤くれ上った二つの眼の中から奇妙な光がび出した。このは、はもう壁の上の示などは眼の中にない。ただたくさんの真な がふらふらと眼の前に浮び出しているのだ。ずばけた秀才として初等から高等まで立けに及第し……村の物持はあらゆる手段をもってをぎ求め、人々は皆神（かみほとけ）のように畏敬し、深く前の薄を悔いてを失うばかり……自分の（ぼろ）屋敷の内を借りする姓を追い出し——追い出すどころか、なかなかどうして彼等自身でび出す——家屋は面目を一新して口には旗竿と扁……位が欲しければ京官（けいかん）となるもよし、金が欲しければ地方官となるがいい。……彼は常日割り当てていた行先が、この潮（うしお）をうけたキンカ糖の

塔のように、ガラリと崩れて、ただうず高き破片のみが余っていた。彼は藻けのをぐるりとして知らず知らず家路に著(つ)いた。彼はようやく自分の家の口に著いた。七人の生徒は一に口をけてがやがやと本をみ始めた。彼はびっくりして、耳のを叩かれたように感じた。ると七人のが小さな子(べんす)を引いて眼の前に浮び上った。部屋中に浮び上っていに挟まれながら跳(おど)り出した。彼は椅子に腰を卸(おろ)してよくと、彼等は夜学に来ているのだが、彼の色をうようにもえた。「ってもいい」彼はようやくのことで、これだけのことを悲しげに言った。子供等はぞんざいに本を包んで小腋(こわき)に抱え、砂をげて(か)け出して行った。土成はまだいろいろの小さながいに挟まれて眼の前に踊り出すのをた。それが、には交ぜこぜになり、にはまたな立(じんだて)に排列され、遂にだんだん少してぼんやりとして来た。「今度もこれでおい」彼はびっくりして跳び上った。明らかに耳の(そば)でしているのである。振返ってみると人がいるわけではない。まるでボンと一つ、を叩くようにもえたので、自分の口でもいいなおしてみた。「今度もこれでおい」彼はたちまち片方の手を上げて指折数えて考えてみると、十一、十三、今年も入れて十六だ、とうとう文章のわかる官が一人もかった。眼があっても穴同然、の毒なこった、と思わずクスクスとき出したが、また然としてたちまち本の包(つつみ)の中から、正しくき写した制芸文と用を脱(ぬ)き出し、それを持って外へ出た。家のまで出ると凡(すべ)てがハッキリえ出し、一群のも彼を笑っているので度肝を

かれて引んだ。彼は部屋に入って席に著くと、二つの眼が常に光った。彼の眼はいろいろのものをながらはなはだ攫（つか）みどころのない。キンカ糖の塔のように崩れた行先が眼の前に横たわった。この行先はひたすら大にのみなりゆきて、彼の一切の路（みち）を堰（せ）き止めた。よその家の煮焚きの烟（けむり）は、ずっと前に消え尽して、箸もお碗（わん）も洗ってしまったが、土成はまでも作らない。ここの屋を借りて住む李（源平藤橘）はいしきたりを知っていて、およその年に当り、成が表されたあとで、このような彼の眼付をると、々（そうそう）をめて、余なことにせぬに越したことはないから、真先きに人声がえ、いて次から次へと火を消してしまうので、え渡った月が独りゆるゆると寒夜の空に出した。青い空は一つの海のような工合で、そこにいささかえる浮は、さながら洗（ひっせん）の中で白（はくひつ）を洗ったように棚曳（たなび）き、え渡った月は土成に向って冷やかな波を灌（そそ）ぎかけ、初めはただ新（あらた）に磨いた一面のにぎなかつたが、このはかえって正体の知れぬ土成の全身を透きとおして、彼の身体の上のに月明（げつめい）を映じた。彼は室外の院子（あきち）の中をさまよっていたが、眼の（うち）がすこぶるハッキリしてあたりは静まり返っていた。静まり返った中にわけもなくいざこざが起って来て、彼の耳にしっかりとした、せわしない小声がえた。